

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	伊丹市立池尻小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	デジタルとアナログの効果的なブレンドの授業づくり

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

一人一台端末が導入され、対話的な学びに ICT を使った新たなコミュニケーションの手段が加わった。これまでは、挙手して発言する児童の意見を中心として授業を展開することが多かった。今では ICT を使うことで、発表することが苦手な児童も含め、全ての意見に触れ、自身の考えと比べることができる。一方、書き込み機能のみに頼ってしまうなど ICT に偏りすぎると、話す力を伸ばすことができなかつたり、心ない言葉を書き込んだりするという問題点も浮かび上がった。話し合い活動をデジタルでおこなうべきか、アナログでおこなうべきか、そのどちらかに振り切るのでは無く、ちょうど良い塩梅を探る。

2. 活動・研究の目的(ねらい)

話し合い活動において「I C T 活用を中心としたデジタルなコミュニケーション」と「対話を中心としたアナログなコミュニケーション」には、それぞれの長所と短所がある。そこで、子どものコミュニケーション能力を育成するために、2つのコミュニケーションの比重を変化させながら、いくつかのタイプのコミュニケーションを発達段階や学習内容を考慮しながら試行し、デジタルとアナログの最適な融合(ブレンド)を探究した。

伊丹市では、一人一台端末として iPad とともに、授業支援システム「スクールタクト」を導入している。これらを使って新しい時代のコミュニケーションの方法を模索した。最初は、とにかく I C T を使ってみることをメインに考えてきたが、思っていたよりも端末利用の日常化は早く進んだ。これからは、その効果的な活用方法について検証していきたいと考えた。

そこで話し合い活動におけるコミュニケーションの3つのタイプを設定した。

タイプ1は、デジタル(I C T)がサブで、アナログ(対話)がメインとした。主として、一学期に実施する。タイプ2は、デジタル(I C T)とアナログ(対話)が半分ずつである。主として二学期に実施する。タイプ3は、デジタル(I C T)がメインで、アナログ(対話)がサブである。主として、三学期に実施する。さらに、教科や単元(教材)によって、タイプ1からタイプ3のどれが適切なのかを実践によって探していきたいと考えた。

3. 活動内容(例)

タイプ1: デジタル(ICT)がサブで、アナログ(対話)がメイン

例) 3年生国語「まいごのかぎ」 物語文の授業。

難しい文章の読み取りをさせ、まなボード(ホワイトボード)に書き込ませた上で、グループで話し合いをさせた。

タイプ2: デジタル(ICT)がメインで、アナログ(対話)がサブ

例) 5年生家庭科「お手伝い大作戦」 発表の授業。

家でやったお手伝いの様子を大型モニターに映して発表。

聞いている児童は、挙手して質問や感想を述べた後、ワークシートに記入させた。

タイプ3: デジタル(ICT)がメインで、アナログ(対話)がサブ

例) 6年生社会科「史上最強の内閣」 スピーチの授業。

スピーチ原稿は、タブレットに入力させる。

スピーチを聞いた児童は感想をスクールタクトのコメント欄に入力させた。

4. 子どもたちへの効果(成果・課題)

(アンケート)

1「まなボード(アナログ)とスクールタクト(デジタル)、どっちが話し合いやすかったですか？」

結果: まなボード 68.8% スクールタクト 31.3%

2「まなボード(アナログ)とスクールタクト(デジタル)、どっちの発表がしやすかったですか？」

結果: まなボード 37.5% スクールタクト 62.5%

3「まなボード(アナログ)とスクールタクト(デジタル)、どっちの発表が分かりやすかったですか？」

まなボード 9.4% スクールタクト 90.6%

この取り組みを通して、ICTを使った様々な授業を実践したり参観したりしてきたが、個人的にはICTをメインにした話し合い活動は難しいと感じた。それは、アンケートの結果にも表れている。だからといって安直に話し合い活動はアナログで、発表にはデジタルでという話でも無いと思う。将来的なことを考えるとICTを使った話し合い活動が必要になる場面はますます増えてくるだろう。だからICTを使った話し合い活動をするためのスキルは必要だ。授業の中で、どのように活用していくのか。私たち教師があらかじめ判断して選んで使わせることも必要かも知れないが、最終的には子どもがその都度デジタルかアナログかを選択できるような授業が理想だと思う。

それを実現させることができるのが個別最適な学びだということに気づいた。

今はまだ、私がコミュニケーションのツールを指定し授業を展開しているが、ゆくゆくは子どもたち自身が、個別に最適なツールをその都度選び活用していけるような授業づくり・学級づくりをしていきたい。